【特集／未来を創る――新しい文化芸術のかたち】

美術館の新しい未来
――アートの役割を考える

インタビュー

青木淳［京都市京セラ美術館館長］

脇坂敦史＝取材・執筆　宮村政徳＝人物撮影

2020年5月にリニューアルオープンした京都市京セラ美術館。「コロナ禍の今、美術館は必要なのか?」という声も聞かれるなか、この美術館は、それ以前から、そもそも現代に求められる美術館のあり方を熟慮し、建物や設備のハードと、展示・運営などのソフトの両面を充実させている。さらに、建築家として同館に関わるだけでなく、館長も務める青木淳氏は、京都・岡崎という地域に、人々に、「開かれた美術館」を提供するべく日々まい進している。青木氏に、その意図や経緯、コロナ禍で見えてくるアートの役割について伺った。

右／平安神宮や京都国立近代美術館などを擁する京都市左京区・岡崎公園内に位置する京都市京セラ美術館。日本の公立美術館のなかでは、最も古い形で現存する由緒ある建物だ。撮影／来田猛　上／1933年、大礼記念京都美術館として開館した当時の写真。海外展の先駆けとして55年「ルーヴル国立美術館所蔵フランス美術展」、64年「ミロのヴィーナス特別公開」、65年「ツタンカーメン展」なども開催され当時話題となった。写真提供／京都市京セラ美術館

博物館や美術館など、文化施設のあり方が深く問われる年となった2020年。京都市京セラ美術館（京都市美術館）は当初の予定よりも約2カ月遅れて5月26日にリニューアルオープンを迎えた。日本で2番目に古い公立美術館（1933年開館）である同館は、2017年から大規模かつ集中的な改修工事を開始。和と洋を融合させた「帝冠様式」の重厚な印象を残しながらも、ガラスのファサードである「ガラス・リボン」を新たなエントランスとして地下に加え、現代美術を中心とした先進的な企画展を行うための新館「東山キューブ」などもつくった。過去の遺産を積極的に生かしつつ、これからの時代にふさわしい先進的な美術館へと、その機能と美を大きくアップデートさせた。

今回のリニューアル計画を設計・指導し、2019年からは同館の館長にも就任したのが、建築家の青木淳氏だ。美術館の建物や設備だけでなく、その運営や企画までも含め責任を担う。ハードとソフトを同時に構想するという、これまでにない新しい形で、一体どんな美術館を実現しようとしているのだろう？　京都市美術館に関わった経緯からリニューアル設計の狙い、新たな構想まで、詳しくお話を伺った。

「京都市美術館は、もしかしたら私が初めて訪れた美術館かもしれません。子どもの頃の記憶だから、はっきりとは分からないのですが、当時の私は小学校3年生くらい。よく覚えているのは、なんだか暗くて怖い場所だなという印象です。振り返ってみると、これは美術館がつくられた当初もっていた建物の意図そのものだったかもしれない。今でこそ美術館は、より多くの人が訪れるように敷居の低い場所であることが求められますが、当時はそうでもなかった。美術館は、いわば権威ある『美の殿堂』であり、敷居は高い方がよい。だから玄関は立派だけど、けっこう狭かったりするわけですね」

このままでも、いい美術館じゃないか

その「暗くて怖い」、古くて権威的な場所というイメージを変え、この建物がもつ大きな可能性に気づいたのは、2015年に京都で開催された国際芸術祭「PARASOPHIA：京都国際現代芸術祭」における同館の展示が契機だった。

「この建物にはもともと東西南北に4つの玄関があり、1階と2階には南北にふたつずつ正方形の回廊が設置され、4つの展覧会を別々に開催できるようになっていました。現在の中央ホールはかつて彫刻作品を置くための『大陳列室』と呼ばれて、全体をつなぐためのロビーとしての位置づけはありませんでした。だから、そもそも建物の全体を見ることがなかったのだと思います。初めて美術館の全体を把握でき、意外にも『現代美術の作品にも合う、現役バリバリの美術館じゃないか！』と驚いたのです」

ふだんは閉じていた東側の玄関が、東山に向けて大きく開いていたのも印象的だった。外に

日本庭園が見え、コーヒーを楽しむ人たちの姿があった。このとき、「このままでも、いい美術館じゃないか」と思えたことが、今回のリニューアルの明快な出発点となった。

もちろん、老朽化した美術館を現代に合わせるためには、多くの改良が必要だった。狭い西玄関の下にスロープをつくり、地下に「ガラス・リボン」という広々とした明るいエントランスを新たにつくったのは、そのためだ。ここにはカフェやミュージアムショップなどが置かれ、展示室に入る予定のない人でもちょっと訪れてみたくなる「敷居の低さ」がある。

「このガラス面は、外を向いたひとつのキャンバスというイメージで設計しました。作品を一種のパブリックアートとして外に提示することもできる。また、夜はこの『ガラス・リボン』自体が作品にもなる。中から光が漏れて綺麗なんです。岡崎地区は夜がけっこう暗いのですが、美術館の閉館よりも遅い時間までカフェを開け、夜も散歩できるようなところになればいい」

古いものを新しいもので置き換えるのでもなく、かといって新旧のコントラストをことさら強調するのでもない。古いものに新しいものをなじませながら現代に合わせる。プロポーザル・コンペから青木氏が一貫して提示したリニューアルの思想は、京都市側の描いた新しい美術館の構想とも一致するものだったようだ。美術館の館長に就任してほしいという、想像もしていなかったオファーには驚いたが、「蛮勇をふるい引き受けることにした」のは、美術館のハードとソフトは決して切り離せるものではないからだという。公共建築においては、建築家が設計で思い描いた建物の使われ方と、実際には真逆になってしまうことも珍しくない。

「ハードの問題はつねにソフトの問題を含むし、ソフトの問題もハードの問題を含む。よく誤解されるのですが、美術館の館長というのは、展覧会を企画する職業ではありません。美術館には、展覧会を企画するキュレーターのほかにもたくさんの専門職がいる。そのなかで館長は英語でdirector、つまり美術館が動いていく方向を指し示す仕事。新しい美術館の姿勢が定まり軌道に乗るまで、試運転してみようと思いました」

「揺れ動く美術館の今」が見えてきた

青木氏が建築家として初めて美術館と真正面から向き合ったのは、1980年代の終わり。水戸芸術館（1990年開館）で当時としては先進的な「現代美術ギャラリー」の設計に携わったときから。このとき追求したのは、どんな作品でも受け入れることのできる、主張の少ない白い壁面を特徴とする「ホワイトキューブ」と呼ばれる展示室だった。外の世界と隔絶され、ただ作品のためだけに存在する、どこまでも抽象化された部屋。現実にはもちろん不可能ではあるが、そんな理想上の空間を実現するために、天井を斜めにして照明を均一にするなど、建築家はさまざまな工夫を凝らした。

その後、2000年からは青森県立美術館の設計にも携わった。この時期には青木氏の考えも、時代の趨勢（すうせい）とともに変わりつつあった。展示空間としての理想を追求した「ホワイトキューブ」を残しながらも、三内丸山遺跡の隣という立地の特殊性を生かした、「発掘現場のような」個性的な空間を敢えてつくり、作品との有機的な呼応が生まれるようにしたのだ。古くて重厚な、やや前時代的ともいえるデザインをもつ京都市美術館であっても、十分に現代的たりうる。そのように確信して新たな美術館像を提案することができたのは、こうした豊富な経験があったからこそ。

「美の殿堂」という過去から、より開かれた美術館へ。時代とともに、美術館に求められる役割や価値は変わってきている。建築家である青木氏が館長として初めて美術館の「内部」に飛び込んでみて感じたのも、「この世界は今、揺れ動いている」ということ。たとえば、「開かれた美術館」という大きなコンセプトについては一致できても、その中身や方法論はどうあるべきか、という共通認識はまだできていない。

そんな「揺れ動く美術館の今」を、いわば炙り出してしまったのがコロナ禍といえるのかもしれない。この困難な時期にリニューアル開館した京都市京セラ美術館の取り組みは、さまざまな形で報道され、注目も集めた。

「2カ月遅れで開館したものの、相当に絞った数しかお客さんを入れられないということで、事前予約制という方法になった。また私たちが一番重要だと思っていたことのひとつである、東西を自由に行き来できるような通路としての美術館もまだ実現できていない。入るときに検温をする必要などがあり、人の流れを止めてチェックしないといけないからです」

大規模展覧会のあり方に一石を投じたコロナ禍

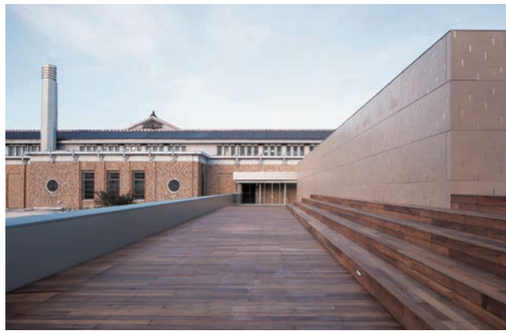
コロナ禍による「ソーシャルディスタンスの確保」は、日本中の博物館や美術館で過去にないような対応を求めることになった。とりわけ大きな影響を被ったのが、大量動員を見込んだプロモーションを協賛企業と共に行う「ブロックバスター展」と呼ばれる大規模な展覧会だ。

「そういうモデルだけで美術館を経営しようと思うと、とても危険なことが明らかになりました。これは、観光業だけに頼ったまちづくりが脆いのと同じです。予想していたわけではないのですが、偶然にも美術館のリニューアルにあたり私たちが考えてきたことと重なりました。

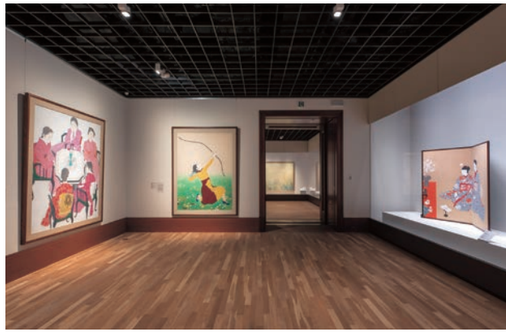
つまり、これからの美術館はひとつのタイプの展覧会ばかりをやるのではなく、さまざまな活動を複合的に行っていく必要がある。なかでも美術館の核となるのは、いつの時代も収蔵品です。今回のリニューアルで初めてコレクションルームをつくりましたが、これは美術館の収蔵品を最大限に生かすための場所です」

常設展示室というと、企画展を見終えた客の一部がまばらにいるだけの寂しい部屋を思い浮かべる人も多いかもしれない。日本の美術館では長いあいだ常設展示の重要性が強調されることはあまりなかった。だが、海外から有名作品を借りてくるような展覧会を開催することが難しくなった状況からも、これから大いに再評価されることになるはずだ。

一般的に美術館の役割として「収集保存」「調査研究」「展示公開」「教育普及」が挙げられることが多い。青木氏の語る「複合的な活動」もまた、これらを発展させたものといえる。「調査研究や教育普及も、美術館にとって非常に大切な役割です。なかでも、やや一方的なイメージのある『教育普及』という言葉は、『ラーニング・プログラム』と呼びかえることにして、内容も大きく見直すことにしました。それは、作家を呼んで講演をしてもらう、というような催しだけではありません。違う立場にいる人た



上／主に現代美術を紹介する新設の「東山キューブ」。写真は「平成美術：うたかたと瓦礫（デブリ）1989–2019」（～4月11日）展示風景。撮影／木奥恵三
下／屋上「東山キューブテラス」からは日本庭園も望める。撮影／来田猛



リニューアルを機に「南回廊」1階に新たに設けられた「コレクションルーム」。撮影／福永一夫

新進作家の作品を中心に発信するスペース「ザ・トライアングル（写真は地上北西エントランス部分）」。撮影／来田猛

本館の中心に位置する天井高16ｍの明るく開放的な「中央ホール」。地下１階から２階への３フロアや「北回廊」と「南回廊」、「東山キューブ」「日本庭園」を自由に往来できるハブとしての機能をもつ。バルコニーやらせん階段も印象的で、まさに青木館長が目指す「開かれた美術館」の要となる場所だ。

ちが集まり、いろいろ話し合ったり、一緒に何かをするということが、もっと美術館の中で行われてほしい。完成された作品や展示を見に行くだけでなく、つくっていくプロセスも含めて美術を見ていく、考えていく、捉えていく、関わっていく。そんな場所にしたい」

そのための交流拠点として考えられているのが、子どもも大人も遊び感覚でアート鑑賞を楽しめるラーニング・ツールを常備する「談話室」。また、美術館の中だけでなく、京都のまち中で気軽に文化芸術と親しむ交流プログラム「アート・ピクニック」も準備している。これは、食や着物、茶道や工芸といった生活に根ざしたアートを楽しむためのハブとして、美術館がより積極的な機能を担うことを意味している。

日々、新たな見方を発見することが大切

コロナ禍が投げかけたのは文化や芸術がビジネスとして成り立つか、という問題だけではない。ときには「こんな大変なときにアート?」という露骨な形で、その存在意義までが揺さぶられているように見える。そうした問いかけに対し青木氏は、問題の根本はやはりアートの敷居が高く、その必要性が感じられないことなのではないか、と静かに答えてくれた。

「マンガをはじめサブカルチャーもアートだという話はもちろんですが、人が生きていくうえで、これまでになかった何かをつくるというのは、かなり根源的な本能。私たちはアートという言葉を、少し狭く捉えすぎていると思う。

たとえば、栄養をとる食と楽しむ食は、違います。美味しい、楽しい、美しいといった価値が結びついて食がある。美味しいものを食べたい。綺麗なものを着たい。面白い映画を見たい。気取らず、生活のなかにあるものの延長としてアートを考えたい。そして、そんな生活のなかに発見をもたらしてくれるのもアートの役割だと思います。よく言われるように、ゴッホの絵を見ると『ああ、こういう風に自然が見えるんだ!』という発見がある。人間は五感でさまざまな情報を感じているようで、実はそうではない。先入観と固定観念で理解していることの方が多い生き物です。その息苦しい状態から解放してくれ、新たな見方を与えてくれる。それは、人間にとって必要なことではないでしょうか」

私たちがふだん文化だとか芸術だと思っていないもののなかにも、アートはある。そのことを、建築家としての経験からも語ってくれた。

「住宅設計を頼まれるとき、よくクライアントから『僕らは普通の人間だから、普通の家をつくってください』と最初に釘を刺されるんです。でも、その人たちの希望を聞きながら丁寧に設計すると、いつも最終的にはすごく変わったものになる（笑）。誰もが非常に違っていて、ただ違っていることに気づいていないのです」

建築ではよく、「用、強、美」という言葉を使う。用は建物や部屋の機能（ファンクション）であり使いやすさ、強は丈夫で壊れないこと、美はもちろん美しさだ。用や強のなかにも美が紛れこんでいるのと同じで、自分のなかにある「普通」にも、アーティスティックな個性は必ずあるということなのだろう。それを日々、発見するための楽しく必要な場所として、美術館は存在できるのではないだろうか。

子どもたちが集まってくる場所にしたい

多くの制約が残るなか、ようやく少しずつではあるが新しい美術館の形が見えはじめている。

２０２０年12月は京都市の岡崎地区で、「CONNECT ⇄（コネクト）」という新たな試みも始まった。これは美術館、劇場、図書館、動物園などの文化施設が連携しながら、障がい者の文化と芸術を各方面とつないでいく、文化庁などが主催するプログラム。京都市京セラ美術館では「ガラス・リボン」で3人のアーティストを紹介。ガラス面を通してオープンに開かれた展示は、文字通り軽やかに外部とコネクトしていた。

もうひとつ、小さいけれどもきらりと光る美術館の「顔」となりそうなのが、北西の角に新設された「ザ・トライアングル」という展示スペースだ。ギャラリー自体は地下にあるが、地上部分は大きなガラス張りとなっており、こちらも美術館と外部の橋渡しという役割を担う。

「ザ・トライアングル」が目指しているのは、新進の作家たちを継続的に育成し、支援していくこと。やはり無料で観覧できるスペースを提供することで、市民や観光客らが気軽に現代美術に触れる機会をつくろうとしている。

「作品の展示は作家だけではなく、仲間とか知り合いの学生たちとかに手伝ってもらいながら、1週間くらいかけて設営するでしょう。そうした過程まで含め、美術館を、人が集まってきて活動するための場所として開いていきたい」

自由な通り抜けや回遊は、まだ十分に実現しているとまではいえない。人が集まることを前提とした意欲的なラーニングの試みも、これからの課題だ。けれども、オープンから半年以上が経過し、美術館を訪れる人の平均年齢は大幅に下がったように感じられる。美術館のカフェ「ENFUSE（エンフューズ）」で販売するピクニックセット（お弁当と飲み物、美術館図録がセットになっている。11月末まで。春から販売再開予定）をもって周囲の芝生でくつろぐ若い人たちの姿も話題になった。これは、先述の交流プログラム「アート・ピクニック」へ向けた布石でもある。

さらに青木氏が注目するのは、もっと若い人たち。たとえば、小学生や中学生を美術館に呼び込むことだ。

「近くにある小学校の生徒たちの姿が、まだあまり見られないのは残念です。子どもたちにとっても、面白い場所だと思うんだけど。たぶん、まだ敷居が高いのだろうなあ。まずは来てもらうことが大切だから、少しでも彼らが楽しめる場所にしていきたい。

ヨーロッパやアメリカへ行くと、学校の授業で美術館や博物館が盛んに使われるだけでなく、当たり前のように小さい頃から子どもたちがそういう場所に親しんでいて、だからこそ大人になってからも応援してくれるという循環がある。その意味でも、子どもはすごく大切です」

かつて、初めて美術館を訪れた少年が「暗くて怖い」と感じてから、半世紀以上がたった。近い将来、美術館で子どもたちの笑顔があふれる光景が見られるとしたら、実に素晴らしいことだ。そのとき、本当の意味でこの美術館は新たな時代を切り開いたことになるのだろう。「美の殿堂」の重い扉を開け放ち、まちの人やモノ、コトとつながっていく。「開かれた美術館」を目指す建築家の挑戦は始まったばかりだ。

［取材日：2020年12月14日］

青木淳（あおき・じゅん）
1956年、神奈川県生まれ。82年東京大学工学部建築学修士修了。磯崎新アトリエ勤務を経て、91年株式会社青木淳建築計画事務所設立（2020年、ASに改組）。住宅、公共建築、商業施設ほか多くの作品に着手。主な作品に潟博物館（1997）、青森県立美術館（2006）、大宮前体育館（2014）、三次市民ホールきりり（2014）など。また新潟県十日町市の中心市街地活性化事業にも取り組む。京都市京セラ美術館の改修設計（のちに同館館長に就任）では、「第62回毎日芸術賞」を西澤徹夫氏と共に受賞。